

Ⅲ．石見型埴輪の検討

形象埴輪の中で、最も多く出土しているのが石見型埴輪である。畿内周辺に分布し、何を模したものか不明な点も多いこの埴輪は、各地での出土例から大きく3つに分類できる⁴⁾(第4図)。

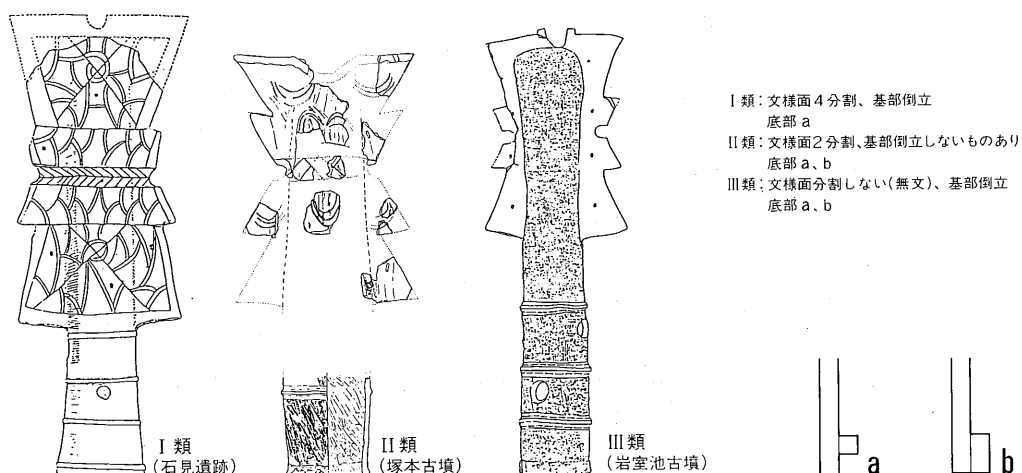
I類は、文様面を上下に4分割して直弧文や鋸歯文等の文様を描くものである。時期が下るにつれて文様が退化していく傾向にある。伊勢、三河では突帯を貼付して文様面を分割するものがみられる。円筒埴輪を倒立して基部をつくるのが基本である。

II類は、文様面を上下に2分割するものである。上端に粘土紐貼付や鋸歯文を描いて装飾するのが認められる。鱗部は上下に段をつけて広がるものがほとんどであるが、段をつけずに広がるもの(II')も少数ながら存在する。また、中央の分割帯には斜格子を描くもの(IIA)、粘土帯貼付のもの(II B)、界線のみのも(II C)がある。基部には、円筒埴輪を倒立してつくるものと粘土を積み上げてつくるものとがある。

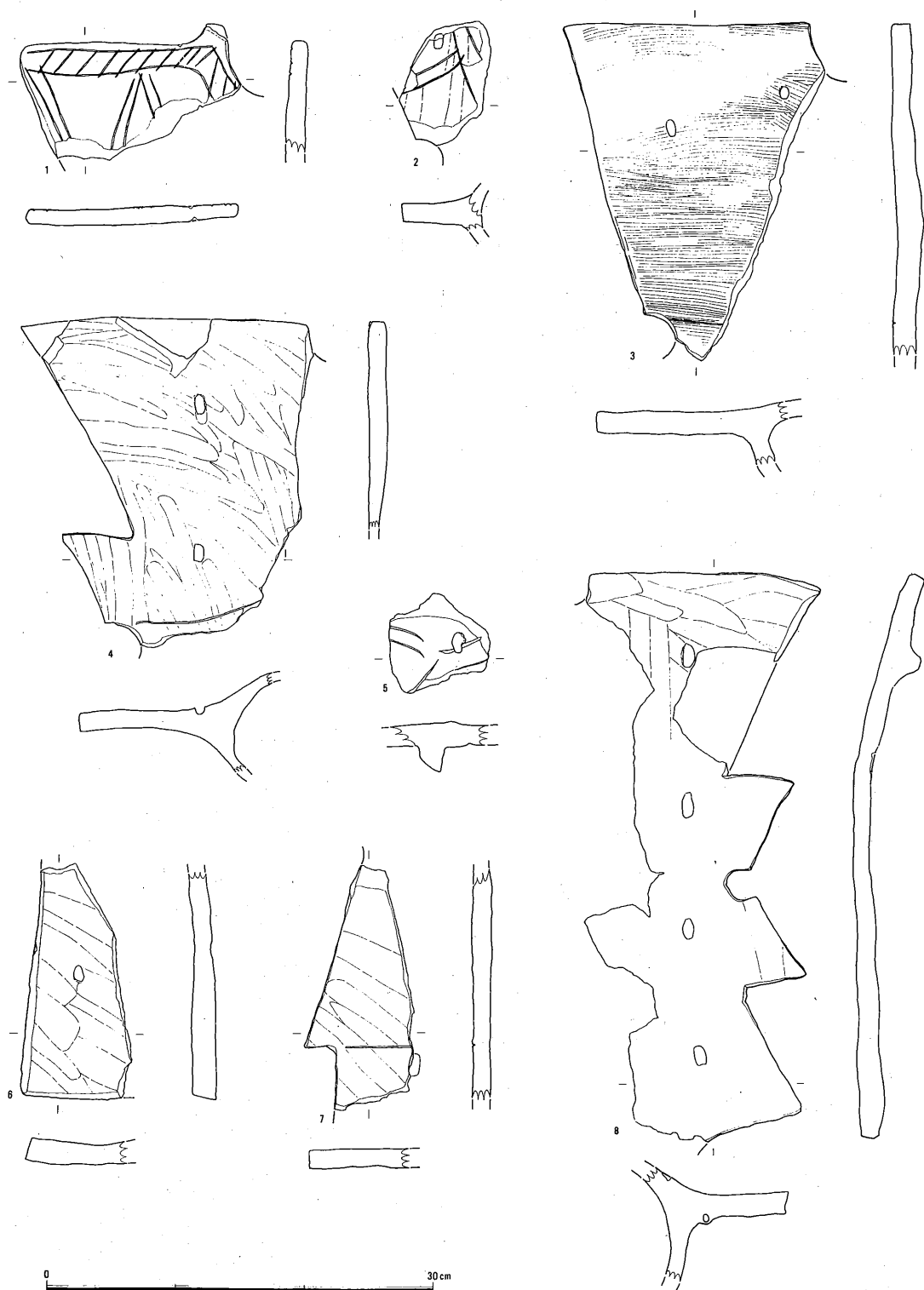
III類は、無文で文様面を分割しない。I類と比較してかなり小型化している。円筒埴輪を倒立して基部をつくる。

さらに、石見型埴輪には底部外面に突帯がめぐるという特徴がある。そして、その形態から底面より上に突帯がめぐるもの(a)、底面と同じ位置で突帯がめぐるもの(b)の2つに大きく分類できる。時期が下るにつれて、a、bともにヨコナデが省略され粗雑化する傾向にある。aはI～III類においてみられるが、bはII、III類にしかみられない。

さて、以上の分類に従い菅原東遺跡から出土した石見型埴輪について概説しておく(第5図)。1はI類の可能性があるが、小型で靱形埴輪とも考えられる。4号窯出土。2はI類に属し、SK 13から出土。3はII' Cで4・6号窯から出土。4はII Cで2・3号窯灰原最下層から出土。5はII



第4図 石見型埴輪の分類



第5図 菅原東遺跡出土石見型埴輪 (1/5)

Aになるのではないかとと思われる。3号窯灰原最下層から出土。6・7は上下に広がる段の位置に線刻を入れて文様面を2分割する。4号窯出土。8はⅢ類で2号窯床最上面から出土。4・6号窯からはⅡ類のみ出土し、Ⅲ類は2号窯の操業期間中に焼成され始めるものと考えられる。

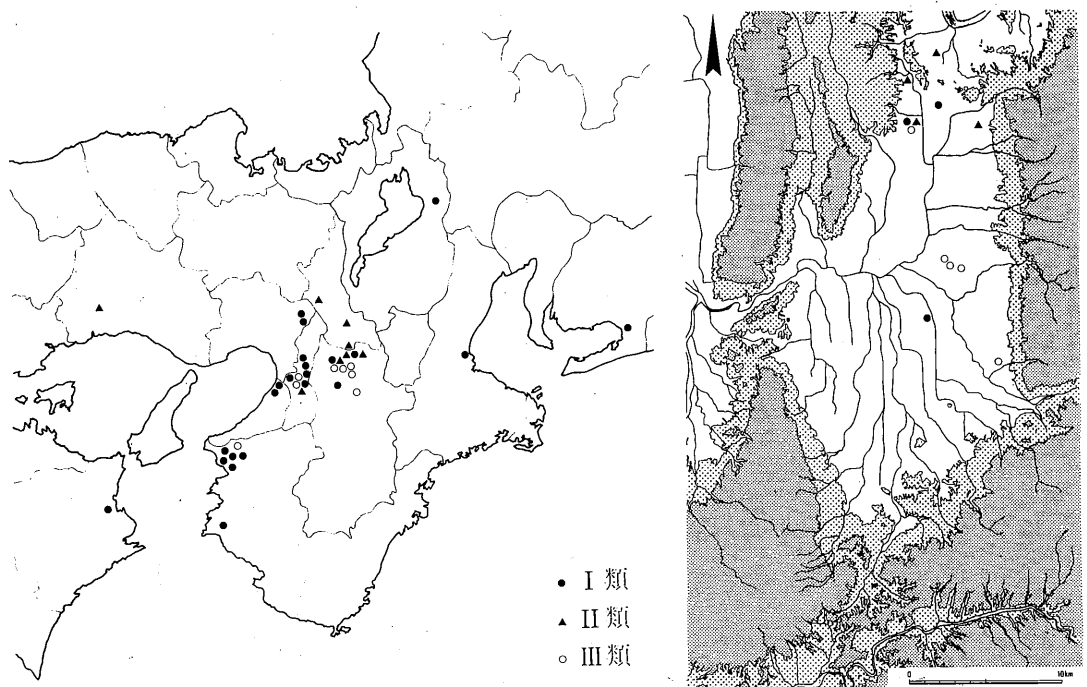
次に石見型埴輪の分布について考えてみたい。Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ類の順で出現したとみられるが、その分布は互いに異なる。(第6図)

Ⅰ類は、河内を中心として分布する。石見型埴輪は、断続ナデ技法とともに河内において創出された可能性が高く、この段階の埴輪生産は、河内に主導権が存在していたと推測される。河内に次いで出土例の多い紀伊では、文様や形態において退化したものも多く、その主導性は考え難い。近江、三河、伊勢、阿波で出土しており、畿内の周辺部にまで分布が広がっている。

Ⅱ類は、山城から大和北部にかけて分布が集まる。大和北部においては、Ⅰ類とともにⅡA～ⅡC類の存在を確認できることから、Ⅱ類の出現とその伝播に関しては大和北部が主導的役割を担っていた可能性が考えられる。

Ⅲ類は、大和を中心に出土しており、分布地域が縮小する。紀伊ではⅡ類を経ずにⅠ類からⅢ類へと変わる可能性がある。Ⅲ類の出現時期には、大和が埴輪生産の主導性を有していたものと考えられる。

石見型埴輪は畿内の埴輪祭祀を特徴づける存在である。大和北部ではⅠ～Ⅲ類を確認することができ、ここが埴輪文化の伝播における拠点的作用を有していた地域と考えられる。(鐘方正樹)



第6図 石見型埴輪の分布